―探求・川にちなんだ万葉集の歌―

万葉の川心 第17回

川崎市立木月小学校教諭　舩田　園子

東歌

明日香川明日香川　下濁下濁れるを知らずして
背なと二人　さ寝て悔しも

明日香川明日香川　塞くと知りせば　數多夜も
率寝て來ましを　塞くと知りせば

（巻第十四　三五四四番歌・三五四五番歌）

一夜の恋。出合って、ひかれて、そうなることが当たり前のように結ばれて。先のことは考えず、ただ、今の気持ちに正直に。流れていくのか流されるのか――真夏という季節は、悪魔のささやきが、夢を現に変える。たとえば、行きずりの恋。たとえば、冒険まがいの恋愛事件。すべてのことを闇に隠して、心だけを信じて、一夜の夢とわかっていても落ちていく。大人の恋は、男と女の下心が互いに見え隠れするところに、艶があるのかもしれない。しかし、過ぎてしまえば、やはり、夢の中の出来事のような、夏は不思議なまやかしの季節である。

この「下心」という言葉は、万葉集巻第一にもでてくるが、現在のような意味ではなく、「心のそこ・本心」という意味である。先の歌、三五四四番歌は、「川の表面はどんなに美しくとも、その底はわからない。そのように、下の心が濁っているとは知らないで、あなたと二人寝てしまったことを後悔しています。」という歌である。「背なな（せなの）」とは、女が夫、または、男子を親しんで呼ぶときの上代東国の方言である。響きも、言葉も、女らしくて、決して恨みがましいのではなく、むしろとてもかわいらしい女性像が浮かんでくる。

「一夜の恋とは知らずにいました。あなたと寝てしまったなんて。」

そして、次の歌。

「二人の仲が塞き止められると知っていたなら、あまたの夜をともに過ごしてくるのであった。知っていたなら。」

「あまた夜」といっても、一、二を越える数のことらしい。いずれにしても、「一夜だけでなく、もっとお前と共寝してくるのだった。会えなくなると知っていたなら。」という、悔しさのような愛しさのような、男の気持ちが表われた歌である。何度も読んでいると、この二首は、女の気持ちと男の事情がからみながら並べられているような気がしてくる。どちらも、明日香川に寄せて、方言の響きや東国の風情、そして、そこに住む人々のまっすぐな想いを詠み、そ歌が人々の心を通して、都にも伝わったのだろう。

明日香川というと、有名な大和の飛鳥川を思わせる。それが、東国の歌に詠まれていることを考えると、歌における東国と大和の交流は盛んであったと思われる。都で歌われた短歌は東国に伝わり、その地の人々に愛され、歌われる。すると、都の地名も川の名も、すっかり人の心になじんで、自分の想いに寄せて歌う。また一説には、同じ名前が各地の川につけられたとも考えられている。「坍（あず→あす）」には、崩れた岸、がけという意味がある。それで、あすか川は、がけのある川という意味で東国の川にも名付けられたかもしれない。とはいえ、都の地名が入っていても、都人の真似にはならず、東歌の素朴さがそのままにいかされている。そして、それが、また都に伝わって、愛され歌われる。歌はいい。本物は、東も西も、国も時代もその境を越えていく。

写真は、群馬県高崎市の山名丘陵にある、高崎自然歩道の途中に建てられた三五四五番歌の歌碑である。この歌だけでなく、たくさんの万葉の歌がそれぞれ巧みな味のある字体で石に刻まれている。ここ、山名丘陵には、山上古墳、山名城址、山名八幡宮と、歴史的建造物が多く、古代から重要な役割と文化を担った土地であることが、その変わらぬ山の神々しさからも感じられた。